

手を引かれる

電車から降りると、ドン、という音がして、胸の内側が少し震えた。

音の方向に目をやると、夜空に花火が上がっている。意図的なのか、二階にある駅のホームは半分程しか屋根がなく、露天の部分にいくらかの人が集まって花火に歓声を上げている。高津<sup>たかつ</sup>の目の前には窓があつて、花火の下半分ほどが見えた。

「お、花火まだ終わってないね、よかった」  
電車が発進し、夜景に窓を浮<sup>うか</sup>び上<sup>あが</sup>らせながら去って行くと、後ろにいた美代子<sup>みよこ</sup>が明るく言った。

「開始の前後と終わった後はとにかく混むからさ。こっから十分は歩くのにみんな好きだよね」

高津が曖昧に頷突きながら改札へ向う階段を見ると、花火大会が始まって一時間以上経っているだろうに二十人ほどの人々が下りて行っていた。それぞれの頭が上下に揺れながら階下に消えて行く。又窓越しに火薬の弾ける音がした。

ホームにあるベンチに荷物を置いて、手土産の確認と、身形の確認をした。真夏のピークは過ぎたと言うものの、まだ大分蒸し暑い。ネクタイをしていると熱気が籠って逃げていかない。しかも今日は緊張感が加わっているから冷えた汗も背中を伝う。美代子は高津のネクタイを整えながら

「上着はうちの門の前でいいからね、うん、ネクタイはオツケー」と言った。

高津は美代子に差し出されたミニタオルで額と頸回りの汗を拭いた。恋人の親へ挨拶に行くのは二十八年生きて初めてだ。しかも只の挨拶ではない。「娘さんをぼくに下さい」

は大袈裟にしても、「美代子さんと結婚させて下さい」ぐらいは言うべきか。直前になっても猶悩んでいると、背後を急行の電車が通過して過剰に驚ろく。

美代子は腕時計を見た。

「時間がちよつと微妙だね。私トイレ行ってくるよ。飲み物も買ってくるから、ここで待ってて」

高津が頷突くの見届けることもなく美代子は階段を下りて行つた。美代子は格好こそ他所行きだが、態度は平静そのものだ。「うちの親にかしこまる必要まったくないから。いつも通りでオツケーだよ」と事前に言っていたが、挨拶に行く側としては、其言葉額面通りに受け取れる訳がない。畏まる所か縮こまるし、隠さずに言えば、怖い。高津は額にタオルを当てたまま、ベンチの不健康な青を凝と見つめた。

美代子がペットボトルを手に階段を上がってきた所で、高津の携帯電話が鳴つた。先輩

だ。高津は震える携帯電話を美代子に翳<sup>かざ</sup>して、身振りで電話に出るから荷物を頼む旨伝えた。美代子は指で環<sup>わ</sup>つかを作ると引き続き階段を上がる。高津は小走りで移動しながら電話に出た。

「はい、もしもし、高津です」

「俺だけど、今平気？」

周りを見渡すと屋根のない部分に来ていた。多少騒がしいが、美代子の近くよりはいい。高津は答えた。

「はい、とりあえず大丈夫です」

「あれ、これからだっけ。彼女の実家にご挨拶」

「そうなんですよ、緊張して心臓飛び出しそうです」

先輩が大きな声で笑った。「お前心臓弱いな。まあ、でも、相手のお父さんに会うのってやっぱ緊張するよな。俺んときも」

先輩の声を聞くと、少し平生<sup>へいぜい</sup>が戻ってきたような心地になった。用件としては仕事の簡

単な確認だったので、世間話を挟んで電話を切る。高津は携帯電話をポケットに入れ、一息吐いた。

同時に、ドドドン、と連続した音が響いた。一際大きな歓声上がる。左を見ると、遠くではあるが、いくつもの花火が鮮やかに見えた。緑、赤、青、オレンジ、ピンク、目で追う間も休む暇なく打ち上げられる。その度に全身がわずかに震えた。振動が、距離を超えて、高津の胸に伝わる。何十発も続いた後、最後の合図かのように、ドン、と一つだけ花火が上がった。

高津は花火が終わった後の暗やみを、その儘見続けた。光は一切の名残を残さないのに、光の後の夜は、いつもより濃い。近くには十組ほどのカップルがいて、よかったね、綺麗だった、と余韻にひたっていた。その内一人が言った。

「また、来年も見ようね」

目瞬きをした其一瞬の、目瞼の裏に、蘇

える景色があった。「また、来年も見に来ようね」蘇よみがえる声があった。紗奈さな。浴衣姿ゆかたで、花火に感動して潤んだ瞳で、そう言った。

もう三年も前になる。当時付き合っていた恋人、紗奈は、イベントが好きで、花火大会にはきちんと浴衣ゆかたを着てきた。高津は自分が通常の洋服で来てしまったことを申し訳なく思った。ごめんと謝ると

「私が着てきたかったんだよ！」

屈託なく笑った。そして、

「そうしたら、来年、一緒に浴衣着ゆかたて花火見よう」

と高津の手をとって躁然はしやいだ。

花火そのものよりも、花火に喜ぶ紗奈が印象に残っている。キャラクターの花火が上がると「かわいい」と笑い、特大の花火が上がると、声を失って一つの光さえ見逃すまいと、熱心に目を凝こらしていた。

高津は今まで女の子と花火を見に来て、ここまで喜んでもらえたことがなかったから、

自分が至高のプランを考え出した粹いさな男であるかのように思えた。この子と結婚したら、日常の色んなことを、笑って楽しんでくれるのかもなと思えた。結婚願望の強い子だったから、まだ付き合って一年足らずではあったが、結婚のことを意識し出した。最後の花火が上がると紗奈は涙ぐんで言った。

「また、来年も見に来ようね」

高津が頭を撫でて、「そうだね」と言うと、「絶対だよ」と縋すがるように言った。高津はゆっくり頷うなずき突ついて、微笑ほほえんで、紗奈の頬のやわらかな曲線を掌てのひらで包んだ。

それから程なくして高津は紗奈に「御両親に挨拶に行きたいんだけど」と切り出した。紗奈は飛び上がった喜んだ。話した其場そので母親へ電話を懸かけた。彼が挨拶に行きたいって言うてくれてるんだけど、勇んで告げた紗奈に母親は

「不安定な仕事の人と会うつもりはありません」

と冷ややかに答えた。

高津は現在働いている会社で、この時派遣社員の立場だった。だが派遣先である現在の会社が高津の働きぶりを評価してくれていたため、三カ月後には正社員に登用することを約束してもらっていた。紗奈がその旨母親に説明すると、

「じゃあ正社員になった後電話してきなさい」

と取り合うことなく答えた。

高津は家に帰って、そうだよな。親の立場からしたら、当り前あたまえだよな、考えたが、紗奈の電話から漏れ聞もきこえた母親の冷えた声が、頭に残った。明確な拒絶。言われて初めて自覚した、それで認められないことがある程の、自分の社会的な欠陥。それを埋めなければと、克服しなければと一層仕事に励み、三カ月後、約束どおりに正社員となることができた時、すぐに紗奈に報告に行き、電話をしてもらった。



「まだ正社員になったばかりでしょ？　すぐ辞めちゃうかもしれないじゃない。ちゃんと一年勤められたらまた電話しなさい」

というのが母親の答えだった。

高津は、結局、派遣社員の分際で大切な一人娘と付き合ったことそのものが気に喰わなかったんだろう、と思った。自分の努力を評価してもらえなかったこと、見ようともしてくれなかったことに対する憤り、失望があった。紗奈はごめんねと言った。でも、一年後、もっともっと頑張って一緒に説得しよう、と言ってくれた。高津は、今、一人で説得してはくれないんだなと思った。

紗奈は実家暮らしで毎日両親と会うから、紗奈が内部から根気強く説得してくれたら、その内翻意するのではないかと、傍から見分には思えた。両親は大抵父親が母親の意向に従うとのことだったので、女性同士、胸襟を披いて話し合えるのではないかと。考えたことを、高津は紗奈に言えなかった。母親の

冷えた声が、耳の中で繰返くりかえされた。紗奈ときくしゃくし出したのはこの頃からだった。

高津は火花が上がった筈はずの場所を、夜空を見ていた。何年経たっても、普段思い出すことがなくても、あの時の紗奈の笑顔、躁然はしやいだ声、そして、母親の声の温度を思い出す。あの子は今どうしているだろう。新しい相手と出会えているだろうか。幸せに、なっているだろうか。自分が新しい相手と出会えて、より幸せになるために踏み出している今の一步步々が、あの子を思い出すほど罪悪感にすり替かわっていく。

それが身勝手な感傷でしかないことは分わかっている。

電話をかけるのも自分ですれば好よかった、断られても、押し掛かければ好よかった、何度でも、頼たのんで、諦あきらめなければ好よかった。自分がやれることはいくらでもあったのに、相手に押おしつけて、抛なげ棄すてたのは自分だ。あの子が渡してくれた「来年」を、手から離おとして落おと

したのは自分だ。自分が、今幸せを感じているから、想像の中で見下ろしながら心配しているだけだ。

各駅停車の電車がとまったが、もう、降りる人はほとんどいなかった。「タカ」呼ばれて振り返ると美代子が手を握って引く。

「電話おわたの、そろそろ時間やばいよ」二人で走って荷物を手に取る。「忘れ物大丈夫？」しつかり者の美代子が確認してくれる。高津は頷<sup>うなず</sup>くと、握られたままの手を、持ち替えて指を絡ませる。美代子の手も少し汗ばんでいる。走り出した電車と行き違<sup>ちが</sup>うように、少し急いで、階段を下<sup>くだ</sup>ってゆく。